本棚 古典の散歩道

『あかちゃんの くるひ』
いわさきちひろ 絵・文
武市八十雄 案（至光社　1970 年）

『あかちゃんの くるひ』
－ 親子の「危機」に寄り添う絵本 －

評者　宮下美砂子
（大学院生）

いわさきちひろ（一九一八‐一九七四）の代表作の一つである『あかちゃんの くるひ』（至光社 一九七〇年）は、幼い女の子が初めて「姉」になるときの揺れ動く心の様子を描いた絵本である。

一人の女性が生涯に産む子どもの平均人数が一・四二人（二〇一四年のデータ）という現代まで『あかちゃんの くるひ』が読み継がれているのは、すでにこれが絵本の「古典」となりつつあるからかもしれない。しかし平均はあくまでも平均でしかない。現在、幼稚園の年長クラスに通う私の息子の周辺では、「子どもは二人」の家庭がいまだに多数派だ。この数年間で、続々と「姉」や「兄」になるクラスメイトも出てきた。そして、二人目を授かったお母さんたちはほぼ例外なく、口をそろえて「二人目を妊娠してから子どもが不安定になった」と訴える。

そのような話を耳にするたびに、私はこの

宮下美砂子（みやしたみさこ）
千葉大学人文社会科学研究科 博士後期課程。専門は、戦後日本の表象文化。主にジェンダーの視点に立脚した絵本の研究を行っている。

絵本のことをいつも思い浮かべる。

絵本の内容

本作の主人公は、四～六歳と思われる女の子である。物語は、一貫してこの女の子の目を通して語られる。まず冒頭だが、女の子の母親は家を「ずっとおるす」にしている。おそらく出産のために数日間入院しているのだろう。そして今日、留守にしていた母親と生まれたばかりの赤ちゃんが家に帰ってくる。

女の子は、初めて会う赤ちゃんに「なにかあげたいな」と考え、熊のぬいぐるみをプレゼントすることを思い付く。しかし、それは自分がずっと大事にしていた「くまちゃん」だった。大事な「くまちゃん」をあげてしまう寂しさと、姉になる自負が相克する場面だ。「くまちゃん」に限らず、少女はこの日、自分が赤ちゃんの頃に使っていた「うばぐるま」や「べっと」を、新しく来る赤ちゃんに譲り渡さなければならない。もう自分には必要のない物とわかっていても、女の子は「くまちゃん」に話し掛けながら、感傷的にそれら愛着の深い品々を眺める。その反面、成長した弟と自分が楽しく遊ぶ姿も空想し、姉になることへの喜びも感じている。

さまざまな気持ちが複雑に行き交ううちに、母親が赤ちゃんを連れて帰ってくる。心の準備がまだ整っていない女の子は慌てふためき、段ボール箱の中に入って隠れてみたりする。

結局、女の子は緊張しながらそうっと赤ちゃんの部屋をのぞき見る。そのかわいらしい顔を見た瞬間に、女の子は「わたしのおとうと」という「姉」としての自覚を明確に持つ。

「下の子」の誕生と親子の危機

物語に登場する「くまちゃん」や「うばぐるま」「べっと」といった品々は、乳児期の自分と母親との愛情関係を象徴していると読め

る。それらを手離し、「下の子」に差し出すことは、赤ちゃんとしての自分からの決別と、母親から自分だけに注がれていた愛情の喪失を意味する。

母親の妊娠は、これまでその愛情を思う存分に独り占めしてきた子どもにとって、人生最大の危機という側面を持ち合わせている。「下の子」の誕生は、「上の子」にとって、親の愛情をはじめとし、さまざまなものを奪い合うライバルの出現でもある。そしてそのライバルは、赤ちゃんという、一人では何もできない最も弱い存在である。そんな時期にこそ、ライバルは最も手ごわい敵になる。新しい命の誕生はもちろん喜ばしいことだが、当事者の親子にとっては、それだけで済む単純な出来事ではない。

特に、「上の子」が幼い子どもの場合は、自分の現状が脅かされる危機的状況を、母親の妊娠期間からすでに敏感に感じ取っている。しかし、それを言語化して大人に伝えるという十分な技術を持っていない。不安定な精神状態から、粗暴になったり泣き虫になったりして、親をあたふたさせてしまう。母親も、妊娠中から出産後は思うように動けないことが多く、「上の子」の要求に十分に応えられないことも多々ある。「下の子」の誕生とは、親子にとっての一大事なのである。

時代背景から読む

実は、同様のテーマを扱った絵本は、洋の東西を問わず数多く出版されている。それは、日本に限らず、「下の子」の誕生というのは、「上の子」と母親にとっての危機であると広く認識されているからだろう。そして、このテーマを扱った絵本の出版は、一九七〇年代以降に増加する傾向にある。『あかちゃんのくるひ』は、国内の同テーマで現在購入可能な絵本としては、最も古いものの一冊である。

『あかちゃんの くるひ』が初めて発表されたのは、至光社が発行する月刊保育絵本『こどものせかい』一九六九年十月号であった。当時の日本社会は、高度成長期が収束し、安定的な成長に移行する中、第二次ベビーブーム突入前夜を迎えていた。すなわち、多くの子どもたちが、この絵本の主人公のように、これから兄・姉になろうとしていたのだ。

戦後の混乱期を脱した日本では、男性が外で働き、女性が家の仕事を担うという性別役割分担と、親子四人を中心とする核家族世帯が、家族の新しい理想像として広く共有され、実際に、都市部を中心にこうした世帯が急増した。高度成長期に絵本画家としての地位を築いたいわさきちひろの絵本にも、同時代の典型的な家族のあり方が顕著に見て取れる。『あかちゃんの くるひ』だけでなく、いわさきの自作絵本（文もいわさき自身による作品）では、そのすべてにおいて父親の存在感が非常に希薄であり、母と子の絆の強さがテーマとされている。

このような家族モデルの広がりと、生活に余裕が生まれたことにより、子どもは母親によって十分に管理され、手間暇をたっぷりとかけられるべき存在となった。つまり、子どもが現在のように家庭内で最も重要と言っても過言ではない存在となったのは、長い歴史から鑑みてそれほど遠い昔のことではない。

日本においては、西洋の近代的「子ども観」が流入し、学制や児童文学が確立した明治期以降に、現代日本で共有される「子ども観」の基礎ができたといわれる。しかし、その後起きた戦争は、子どもたちの環境を大きく変えた。女性たちは「産めよ増やせよ」という戦争遂行のためのスローガンの下、子どもを三人、四人、あるいはそれ以上産んだ。一般庶民の家庭では、子だくさんでありながら食料の確保すら困難な、死と隣り合わせの毎日

を送る時代だった。そうした生活の中では、「下の子」の妊娠のたびに「上の子」に時間をかけてケアをするどころか、その程度のことを気に留める余裕などなかっただろう。

そのように考えてみると、『あかちゃんのくるひ』は、極めて平和で豊かな現代の家庭像を象徴する絵本なのだと言える。

現代への問いかけ

現代日本においては、母親が産む子どもの人数は減少しているが、反対に、子どものために費やす労力は増しているように感じる。育児は母親だけの仕事だという考え方は変化しつつあるが、実態としては、いまだに母親がその役割の大部分を担わざるを得ない場合が多い。そして、子どもにとって良い教育とは何かを追求する傾向はますます高まっており、母親たちは、新しい育児の潮流に乗り遅れないようにと右往左往している。その上、少しでも過剰に子どもに関与する母親は「教育ママ」と揶揄され、手を抜けば「育児放棄」と見なされる。「正しい育児」とは何を指すのか、母親とその子どもたちは時代の流れに翻弄されるばかりである。

さらには労働人口の減少から、女性も仕事を持つことが政策レベルで要求される反面、安心して子どもを預ける体制が整わない現状は、簡単には子どもを産めない環境をつくり出している。育児に関してこんなにも多くのハードルが待ち受けている現代において、たとえ産めても子どもは一人で限界だと思う女性は少なくはないだろう。

本来、子どもを産む人数の選択は個人の自由である。それでも、やはり兄弟・姉妹がいたほうが子どもにとっては良い環境なのではないかという思いを払拭しきれないのが、現代の母親たちの辛いところである。周囲の二人目、三人目がいる家庭と見比べては、プレ

ッシャーを感じてしまう。

そんな母親たちにとっては、この絵本は少々切ない物語かもしれない。現在一人っ子のわが子を例にとると、この絵本を読んだ後、「ママ、赤ちゃん産んで」「赤ちゃんが生まれたら僕がお世話する」などと言いだし、今のところ二人目を予定していない私は返事に詰まってしまう。

しかし、それはこの絵本を作ったいわさきちひろ自身も同じだったかもしれないという点に、私は救いを感じている。いわさきは、三人姉妹の長女として生まれ、戦前のひとときは、恵まれた家庭環境の中、「上の子」が感じる葛藤や、姉妹がいる大切さを、身をもって体験してきたはずだ。そんな彼女も、生涯に授かった子どもは一人だった。戦後の混乱期の中、絵筆で夫と子どもの生活を支えた彼女にとっては、持てる子どもは一人が限界だったのかもしれない。いわさきも、現代の一人っ子の母親が感じる葛藤を同じように抱えていたのではないだろうか。この絵本には、もし下の子がいたら、わが子にもこうした体験をさせられたかもしれないという、かなえられなかった淡い夢が託されているようにも読める。それは、多くの母親に共感される思いであると同時に、産む人数、産まない自由が尊重されない風潮や、産みたくても産めない現実という大きな問題にも目を向けさせる。

『あかちゃんの くるひ』は、母親が産む子どもが何人であろうが直面する現代の親子の危機を訴えかけている。そして同時に、当事者に寄り添う働きも持っている。これからの社会においてもその存在意義を失うことなく、長く読み継がれていく絵本だろう。